

かなはこうして学ばせる

“い”や“の”というかなで、漢字とは本質的に違った文字のあることに気づかせることが、まず第一です。漢字は“花”と“鼻”の例で解るように、発音には関係がなく、物その物を表わした文字ですが、かなは全くその反対で、内容がなく、ただ発音だけを表わした文字です。それを理屈でなく、体験的に幼児に理解させることが大切です。

次に、“歩く”“動く”“書く”“泣く”という言葉で、“く”というかなに気づかせます。決して“歩+く”と分けて教えてはいけません。けれども、幼児たちは、これらの言葉を覚えていくうちに、共通する“く”に気づき、“く”という発音の字だと理解するようになります。

その時、この“歩く”という言葉は、“歩かない、歩きます、歩け、歩こう”と、変化する言葉であることを教えます。続いて、子供たちに、“動く、書く、泣く”という言葉を与えてそれがどう変わるか、考えさせます。

動かない　書かない　泣かない

動きます　書きます　泣きます

動く　書く　泣く

動け　書け　泣け

動こう　書こう　泣こう

このように皆同じ形になることに幼児は驚異の目を見張ります。そこで、“動+ない”の時は“うごく”でなくて“うごか”になる。だから、“動かない”と“か”と発音することを表わす文字を入れたのだ、と理解させます。

こうして、“かきくけこ”という発音を表わすかなの必要性を理解させると共に、これを覚えさせるのです。「観念語は漢字で、かなは単なる音声を表わす語に使用する」という日本語特有の表記法の原理を、幼児のうちに体で理解させるのです。

次に、「流す、起す、賃す、出す」で“さしすせそ”を、「勝つ、立つ、打つ」で“たちつてと”を教えます。